

カナダ研究の潮流(5) — 経済学

主題は地域経済、資源、外資

デビッド・スミス

第5回目のカナダ研究文献解題は、経済学の分野を取り上げる。経済問題一般の研究書は数多くあるが、カナダ経済自体を扱ったものは少ない。カナダ経済あるいはその動向を扱った研究書では、大半が地域、資源、外国投資のいずれかにふれている点特徴的である。

イニス教授の古典的研究

まず、3分野全部にふれている古典的な研究として、Harold Innisの*Essays in Canadian Economic History* (Mary O. Innis編、Toronto: University of Toronto Press, 1956)がある。黎明期のカナダを知りたい人や、カナダの発展に基本的な影響を与えた諸要因を知りたい人には、この本が格好の入門書となるだろう。著者の広い学識と深い洞察力によって、同書はこの分野の研究者がまず読んでおかなければならない基本文献になっている。

イニス教授はカナダの産業研究の第一人者だが、カナダの主要産業といえば、今世紀に入ってから最大の国家的重要性をもつようになったのが、穀物である。C. F. Wilsonの最近の研究*A Century of Canadian Grain Government Policy to 1951* (Saskatoon: Western Producer Prairie Books, 1978)は、なぜそうなったかの理由について、歴史的に明らかにしている。穀物産業の研究で見過ぎてならないもう1冊の本として、Dan Morgan著*Merchants of Grain* (New York: Viking, 1979)がある。また、Kelvin H. Burley編*The Development of Canada's Staples, 1867-1939: A Documentary Collection* (Toronto: McClelland and Stewart, 1970)は、カナダの主要産業を研究する上で非常に役に立つ文献である。

多い地域経済の研究書

一般にもよく知られているように、カナダは地方の比重が圧倒的に大きい国である。したがって、研究者にとって地方の経済問題がきわめて興味ある対象だということは、よく理解できるであろう。この分野の研究書はたくさんある。まず筆頭に東西5地域 (Maritime, Quebec, Ontario, Prairie, B. C.) の経済を比較分析したEconomic Council of Canadaの*Living Together: A Study of Regional Disparities* (1979)をあげなければならない。T. N. Brewis著*Regional Economic Policies in Canada* (Toronto: Macmillan, 1969)、およびN.

H. Lithwick編、*Regional Economic Policy: The Canadian Experience* (Toronto: McGraw-Hill Ryerson, 1978)の2冊も、地方の経済条件をめぐる対応や政策を論じている。これと関連して参考にしていただきたいのは、この連載で以前に紹介したカナダ政府地域経済開発省の何点かの研究報告書である。

地方に関心をもてば、次に地方と連邦との関係に目が向くのは当然のなりゆきだろう。A. E. Safarian著*Canadian Federation and Economic Integration* (Ottawa: Information Canada, 1974)、およびJudith MaxwellとCaroline Pesticauの共著*Economic Realities of Contemporary Confederation* (Montreal: C. D. Howe Research Institute, 1980)の2点は、全体(国)と部分(地方)とを同時に視野に収めた研究である。

カナダの地域の中で、とかく忘れられがちなのが、北方であろう。その点で、K. J. Reaの*The Political Economy of the Canadian North* (Toronto: University of Toronto Press, 1968)は、北方を専門に取り上げた好著である。

外国投資で活発な論議

カナダ経済の研究で第3の特徴にあげられるのが、外国投資の問題である。カナダでは、外国投資をめぐって従来から激しい論議が交わされてきた。A. E. Safarian著*Foreign Ownership of Canadian Industry* (2nd ed., Toronto: University of Toronto Press, 1973)は、この問題を初めて本格的に取り上げた本である。比較的新しいところでは、米資本に焦点を絞ったSteven Globerman著*U. S. Ownership of Firms in Canada* (Montreal: C. D. Howe Research Institute, 1979)がある。

また、国内企業対多国籍企業の問題を追究したGilles Paquet編*The Multinational Firm and the Nation State* (Don Mills, Ont.: Collier-Macmillan, 1972)、そして外国企業というカナダ国内の存在だけを考える一般的傾向に対して、逆の面からライトを当てたE. P. Neufeld著*A Global Corporation: A History of the International Development of Massey-Ferguson Limited* (Toronto: University of Toronto Press, 1969)も、見落してはならない文献である。

経済論議は、カナダでここ数十年続けられてきたナショナリスト(カナダ主義)対コンチネンタリスト(北米主義)の論争とだぶりやすい。とくにテーマが外国投資になると、この傾向ははっきりと現われる。(サスカチュワン大学教授)